

高密度播種育苗のポイント(育苗管理以降～)

高密度播種育苗には以下の留意点があります

- ① 育苗管理不十分による
老化苗、徒長苗・軟弱苗
- ② 移植時の土壌条件不良、深水管理による
浮き苗・欠株、
除草剤の薬害、ワキや表層剥離の影響



初期生育不良による収量低下

ポイント① 育苗

育苗日数の目安が15～20日と短いため、田植作業計画を立て、播種時期を決めましょう！

- 育苗初期に伸ばし過ぎない(硬化期 10～20℃以内)
- 密苗は育苗後半に水不足になりやすいので注意
- 草丈 10～15cm、葉齢 2.0～2.3 で田植え
- 育苗日数の目安 15～20 日



【密苗 2 葉 慣行 2.5～3 葉】

ポイント② 田植え

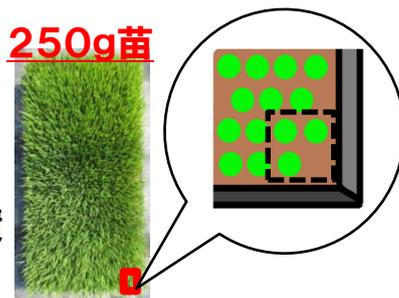
- 1 株の植付本数 3～4 本

必ず移植作業前に、中立状態で苗を掻きとって苗取量レバーを調整し、掻き取り本数を確認する。植付本数が多くなると、株内の競合により、茎が細くなり、不揃いな生育になりやすく、倒伏する危険も増します！

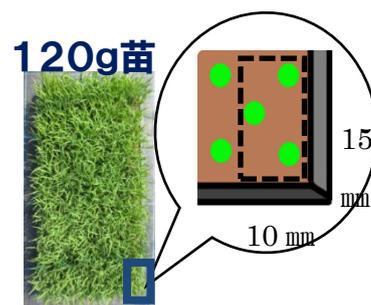
- 浮き苗防止のため、移植時の田面水はごく浅水で、強風時の田植えは行わない
- 欠株防止のため、移植時に苗が乾き過ぎないように注意する

苗の掻き取りサイズ
のイメージ

1 回の掻き取り面積
0.5cm²



高密度播種苗



1 回の
掻き取り面積
1.5cm²

慣行苗

ポイント③ 育苗箱使用

○専用田植機を使用した場合の使用箱枚数の目安

播種様式	栽植密度(坪当たり)	播種量(箱当たり)	使用箱数(10a 当たり)
高密度播種	50~60株	250~300g	ヤンマー 7~9箱 イセキ・クボタ 11~12箱
慣行(稚苗)	50~60株	100~120g	15~18箱

※ 使用する田植機によって10a 当たりの使用枚数が変わります。今一度必要枚数を確認しましょう。

ポイント④ 箱施薬剤の施用方法

箱施薬剤は一箱当たり 50gと決まっています。密播苗では田植時の育苗箱枚数が少なくなるので、本田に施用される箱施薬の量も自ずと少なくなり、病害虫防除効果が通常より劣ります。

○箱施薬剤の施用時期と効果の比較

箱施薬施用方法	施用量(10a当たり施用量)	防除効果
移植時(育苗箱施薬)	50g/箱当たり(450~600g/10a)	通常育苗より弱まる
移植時(側条施薬)	1 kg/10a	通常育苗並み

※ 通常移植の場合、育苗箱枚数 18~20 枚/10aのため、箱施薬の量は 900~1,000g/10a

※ 側条施薬を行う場合は専用機が必要になります。

ポイント⑤ 移植後の水管理

除草剤処理後は水深を田面が隠れる程度にし、1週間は止水にします。その後は湛水状態を保ちます。箱施薬を使用しない場合は病害虫被害を確認次第、すみやかに本田防除を行います。

